

2020年度 青山学院大学 ボランティアセンター活動報告書



AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

2020 年度ボランティアセンター活動報告書

目 次

1. 刊行に寄せて	1
2. ボランティアセンターについて	5
3. ボランティアセンター事業	
コロナ禍の取り組みと新規事業について	7
《学生交流企画》	
Green Up Project (青山・相模原)	7
手話コミュニケーション講座	9
自然体験プログラム (援農・里山)	10
《オンラインボランティア》	
オンライン なかよしダンスプロジェクト	11
カンボジアオンライン日本語サロン	11
《イベント》	
オンライン ボランティアカフェ (青山・相模原)	12
オンライン 国際協力キャリアのリアルに迫る！	13
こどもテーブルボランティア参加者交流会	14
渋谷区版こども食堂「こどもテーブル」を知ろう！	14
オンライン講演会「私たちの未来と地球環境について考えてみませんか？」	15
《講座・セミナー》	
国際協力プランナー入門	16
ユニバーサルマナー検定 3 級	17
認知症サポーター養成講座 (渋谷区版・相模原市版)	18
あすチャレ! Academy	19
ヒューマンライブラリー入門講座	19
学生×子どもの居場所づくりセミナー	20
《サービス・ラーニング科目への協力》	
2020 年度 サービス・ラーニング科目の実施概要	21
《外部との連携・協力》	
共和中学校福祉講座	22
大泉西中学校 SDGs インタビュー	22
アウトサイダー・アート・プロジェクト	22
藤野プロジェクト	23
渋谷区こどもテーブルボランティア	23
4. 学生スタッフ企画プログラム	
学生スタッフ Route について	25
Route 全体報告	26
熊本プログラム	26
福祉プログラム	27
難民プログラム	27
食品ロスプログラム	28

インドネシアプログラム	28
ネパールプログラム	29
フィリピンプログラム	30
5. AOGAKU ボランティアネットワーク	
きすあに / しぶっこ	31
グリーンバード青山学院大学ゴミ拾い愛好会 / 青山子ども会 / STUDY FOR TWO 青山学院大学支部	32
国際政治経済学部公認団体 SANDS / TsunAGU ボランティア愛好会 / アイセック青山学院大学委員会	33
Youth for Ofunato / fan × fun 学生ボランティア愛好会.....	34
SIVA ボランティア愛好会 / MF3.11 東北愛好会	35
6. 資料	
6.1 ボランティアセンター利用状況	37
6.2 ボランティアセンター規定	42
6.3 ボランティアセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ一覧	46
6.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆様	
提携・協力団体	48
寄付・助成をいただいた皆様	49
そのほかお世話になった皆様	49
故 高橋 良輔先生を偲んで	50

1. 刊行に寄せて

センター長挨拶

コロナ禍の中のボランティアとその先へ



飯島 泰裕
(社会情報学部教授)

青山学院大学ボランティアセンターは、ボランティア活動を通じて豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材を育成する目的で、2016年10月に青山キャンパス、2018年4月に相模原キャンパスに設置されました。このミッションを果たすために地域や自治体、NPO/NGOと繋がりながら様々なボランティア企画を立て、学生及び教職員に参加機会を提供しています。

私は、2020年7月に、青山学院大学ボランティアセンター長を拝命いたしました。コロナ禍の真っ最中の就任に戸惑いを覚えながらも、コーディネータの先生方や職員の皆様方に助けられて務める一年でした。ボランティアということの性格上、殆どの企画が対面であり、協働を成功させようとするれば、共に飲食し、共に汗をかき、達成感を仕組む必要があります。ところが、これらをすれば、新型コロナはあっという間に感染を拡大してしまいます。

一方、授業の方は、ICTの力を借り、オンラインでの講義、小テストや定期試験もCoursePower(LMS: Learning Management Systemの一種)を介した提出や受取と、人と人がICTを介してしか接触できなくなりました。ボランティアセンターでも、各種の企画や活動をオンラインでできないのか? 相談などの窓口業務をオンラインでできないのか? を至急、検討し、実施してもらいました。また、各種の会議もオンラインで行うように調整頂きました。

全てオンラインの生活は、精神的には色々な支障を発生させます。特に大学生という多感で、急激に社会適応性が成長する時期に、オンラインでしかできない学生生活は、色々と問題があります。何度かの感染拡大のピークを迎え、秋を過ぎた頃から、対面であっても、十分に消毒を行い、距離を保ち、飲食を共にしなければ、感染が防げることが分かってきました。そのため、そうした遵守事項を確認しながら、対面で行う事業もいくつか実施しました。

この結果、2020年度は、コロナ禍の中でしたが、街中清掃 Green Up Project、手話コミュニケーション講座、自然体験プログラム(援農・里山)、オンラインなかよしダンスプロジェクト、オンライン日本語サロン、渋谷区版こども食堂「こどもテーブル」を知ろう、オンライン国際協力キャリアのリアルに迫る、オンライン講演会「私たちの未来と地球環境について考えてみませんか?」、国際協力プランナー入門、ユニバーサルマナー検定3級、認知症サポーター養成講座(渋谷区版・相模原市版)などを実施しました。

また、当初予定していた時期や方法、連携先の変更を余儀なくされましたが、青山スタンダード科目の「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」「サービス・ラーニングⅠ、Ⅱ」について実施協力を行いました。

ボランティアというと、災害時の支援をイメージすることが多いですが、平常時であっても、困っている人を助けるボランティアは、社会への貢献を示すものであり、市民として重要な活動です。市民とは、社会の構成員なることであり、古代ギリシャ時代から、人は市民に憧れ、なることを切望していました。つまり、市民になることは、とても名誉なことであり、他の構成員と協働することが求められていました。まさに、「地の塩、世の光」への道なのです。こんな時代ですが、ボランティアセンターは、この道をたどり、まだまだ発展していきます。今後も、皆様のご支援ご協力を切にお願いいたします。



大宮 謙
(社会情報学部教授)

副センター長挨拶

思いがけずご指名をいただき、2020年4月より副センター長に就任いたしました。微力ながら、少しでもお役に立てればと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。私自身は、大学宗教主任の一人であり、社会情報学部にも所属しておりますが、2010年よりサービス・ラーニングⅠ、Ⅱという科目を担当し、特に2019年からは、ボランティアセンター経由で渋谷区社会福祉協議会のご支援をいただき、サービス活動先の一つとして、いくつかの「こどもテーブル」活動団体に学生を受け入れていただいています。

センターの会議に参加するたびに、実に多岐に渡って貴重な働きをボランティアセンターが行っていることを教えられ、スタッフの皆さんの取り組みを、少しでもサポートできればと願っています。

青山学院は「地の塩、世の光」をスクール・モットーとし、「サーバント・リーダー」を世に送り出すことを願いつつ教育、研究活動を行っておりますが、ボランティアセンターが、青山キャンパス、相模原キャンパスに所属する学生、教職員の皆さまに、社会とキャンパスを繋ぐ働きに参加する機会を、より一層、提供できればと願っています。また、こうした働きによって、両キャンパスの地域の皆さまに、「あって良かった青山学院」、「イザという時に頼りになる青山学院」と思っただけの存在に、より一層近づくことができればと願っています。

私自身は、30年以上前、大学生活を終える直前に栃木県北部にある農業指導者養成学校であるアジア学院でのキャンプに参加し、既に証券会社に就職が決まっていたのですが職員の方から「林業をやらないか」と声を掛けていただいたことが（実際にその道には進みませんでした）、社会人になってから奥多摩での森林活動（「花咲き村」）に参加する一つのきっかけにもなりました。アジア学院とは今でも関係が続いており、サービス活動先の一つとして学生を受け入れてくださるもいます。

このような長い付き合いになる「貴重な出会い」を提供し、発信する「世の光」として、ボランティアセンターが活動していければと願っています。

ご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

ボランティアコーディネーター

青山キャンパス

ボランティアコーディネーター 佐藤 亜希

今年ほど人との繋がりについて深く考え、そして絆を必要とした年は無かったと思います。先行きが見えず制約の多い1年間でしたが、社会状況の変化と共に新たなボランティアニーズも生まれ、熱心に取り組む学生たちのエネルギーに私たちもたくさんの勇気をもらうことが出来ました。まだまだ予断を許さない状況が続きますが、これまで以上に学生たちに寄り添いつつ、地域とより良い関係を築いていけるよう精進して参ります。

ボランティアコーディネーター 秋元 みどり

サービス・ラーニングとして、予定していた授業や活動参加を変更せざるをえない一年となりましたが、オンラインツール等の活用によって、新しいかたちでの取り組みや視点に気がつくことができました。私たちが、自然や社会の環境をつくる一人であることを忘れずに、地域の変化に寄りそい、公正な社会づくりに参加していく実践を支えて参ります。

ボランティアコーディネーター 島崎 由宇

コロナ禍による様々な制限の中で、地域と学生の間を絶えさせず、学生が地域で活躍できるきっかけ作りを模索した一年間でした。そうした中でも、芽生えた出会いや繋がりが多くあり、自分たちが目指すべき社会に向けて前をみて進む地域のみならず学生たちの姿に私自身も勇気づけられました。今後もボランティアを通じて新たな協創が生まれるよう尽力して参ります。

学生生活部学生生活課 ボランティアコーディネーター 中尾 匠吾

コロナ禍により様々な活動が制限された1年でしたが、これまでのボランティア活動支援のあり方を見直し、再構築する期間にもなりました。この経験を活かして、アフターコロナに向けた大学と地域との連携の深化、サービス・ラーニング推進の基盤整備により一層尽力して参ります。

相模原キャンパス

ボランティアコーディネーター 三神 憲一

ボランティア活動のあり方を改めて考え直す機会が多かった一年であったと思います。対面での活動が制限される中でも、オンラインで出来る活動を模索する学生や、活動を心待ちにしてくれる地域の皆様に勇気づけられた一年でもありました。引き続き新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策をとりながら、地域と学生のニーズに応える支援を行っていきます。

学生スタッフ (Roote) 代表挨拶

文学部 比較芸術学科 4年
堀内 秀平

私は中学生の頃から、地域に関わるボランティア活動をしてきました。そのなかで、生活の中には身近すぎて見落としてしまう問題がいくつもあることを実感しました。さまざまな立場にある人が、日々どのような暮らしをしているのか。豊かに生きるために、何を求めているのか。自分は何をすることで、そうした人々の役に立てるのか。そのようなことを学び、考えていくうちに、日常の中でより広い視野で、より多くの視点で自分の暮らしや地域を見つめることができるようになりました。私にとってボランティアとは、そのように日常において自分の視界の解像度を高めてくれるものだと感じています。

学生スタッフとしての3年間も変わらず同じ感覚がありましたが、加えて、自分がかつて見落としていたような問題の数々と、それを掬い上げることで学べたことを誰かに伝えることの喜びを知りました。同時にその難しさも強く感じましたが、自分が伝えたいことを明確にして、青学生や地域の方々に向けて工夫して発信し、共に学ぶという経験はここでしか味わえない感動がありました。1・2年生の間は障害者福祉に関わる活動をしてきましたが、今までのように「障がい者は何を求めているのか」を考え、実行するだけでは一方通行になってしまうと気付きました。青学生や地域の方々は何を知りたいのか、何を学べば互いに認め合えるようになるのかといったことを考え、自分は一方的に他者を支援するのではなく、異なる立場の人々を繋ぐ役目を担っているのだと感じました。そうした「人と人」の繋がりに寄り添うことが、Rooteの大きな使命だと思っています。

代表を務めた今年度は、新型コロナウイルスが世界中を混乱させ、あらゆる人と人の間に大きな隔たりができてしまった1年でした。現代は離れていても簡単に繋がることのできる便利な時代ですが、「離れている」とことと「隔てられている」とことはまったくの別物だということを痛感しました。このような状況下にあっても、変わらずお力をお貸しいただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

現在の「隔たりの時代」は、あらゆる立場の人々が同じ環境にあり、同じ問題の解決に向けて努力することができる時代だとも言えます。隔たりを受け入れ、新たな「人と人の繋がり」を築くことが今後のRooteの役割だと考えています。そのなかで学生スタッフ一同より成長していきたいと思しますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



2. ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターは青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向けて、実践するボランティア活動を促進させる目的で設立しました。また、2018年4月には相模原キャンパスにもセンターを開設し、両キャンパスでのボランティア活動支援の基盤が整いました。

- 設 立 2016年10月1日設立
- 所在地 青山学院大学青山キャンパス1号館1階
青山学院大学相模原キャンパスF棟2階
- センターミッション
 - ① 学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
 - ② 大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動の社会的効果を向上すること
 - ③ 社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること
- 事業内容
 - A. 活動支援分野（直接的支援）
 - (1) ボランティアへの参画機会の提供
 - (2) ボランティア活動の実施促進
 - (3) ボランティア活動に参加する学生・団体の能力強化
 - B. 環境整備分野（間接的支援）
 - (1) ボランティア活動に関する学内外の専門家・関連団体との連携の促進
 - (2) ボランティア活動の社会的・教育的効果の評価と勧告
 - (3) ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信



青山キャンパス



相模原キャンパス

ボランティアセンターは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。
ボランティア活動を通じて社会問題に向き合う学生、教職員をサポートします。



3. ボランティアセンター事業

コロナ禍の取り組みと新規事業について

2020年5月末に緊急事態宣言が解除されて以降、ボランティアセンターでは新型コロナウイルス感染拡大防止に伴うボランティアセンターの利用・ボランティア活動に関するメッセージをウェブサイトに掲載するほか、リモートでも参加できるオンラインイベントやボランティア活動情報の特設ページを作成し情報発信に努めてきた。また、Zoomを活用したオンライン相談窓口を開設し、遠隔にて学生の対応を可能とした取り組みもおこなった。

後期に入ってからには十分な感染症対策を行った上で、ボランティア活動を通じた学生交流企画としてのボランティアプログラムを実施し、また、これまでボランティアセンターが紡いできた地域や学生とのつながりを絶やさぬよう、学生と地域がつながるための場作りや活動をオンラインイベントとして実施した。

学生交流企画

事業名	Green Up Project
日時	(青山キャンパス) 1回目：9月19日(土)、2回目：10月3日(土) いずれも10:00～12:00 (相模原キャンパス) 11月28日(土) 10:00～12:00
場所	(青山キャンパス) 青山キャンパス正門から表参道交差点、キャンパス内、17310教室 (相模原キャンパス) キャンパス通学路、にこにこ星ふちのべ商店会、グローバル・ラーニング・commons
参加者数	(青山キャンパス) 1回目：14名、2回目：16名 (相模原キャンパス) 5名
内容	コロナ禍でキャンパスライフがなく、学生同士の関係が軽薄化する中、新入生を対象にした清掃活動とキャンパスツアーを組み合わせた単発のボランティアプログラムとして実施した。
成果	参加者は予定時間よりも早く集合し、当日の欠席者がゼロであるなど、活動に対する期待の高さが伺えた。個人での申し込みが大半であったため、最初はぎこちない雰囲気であったが清掃活動やキャンパスツアーを終えるころには近くにいる学生と打ち解け、笑顔が絶えない様子であった。振り返りでは、改めて全体での自己紹介やごみ拾い活動をもっと楽しくするためのアイデア出しをグループで行ったり、学生生活を送るうえでの目標などを述べてもらったりした。終了時には互いの連絡先を交換するなど交流が促進されており、本企画の当初の目的を達成することができた。今回の企画を実施にあたり、第1回目の9月19日には渋谷区環境整備課やごみ拾いで繋がるSNSを開発する株式会社ピリカにも協力いただき、S-SAP協定の枠組みでの実績とすることができた。 今後の新企画についてはグリーンボード青山学院大学ゴミ拾い愛好会の学生メンバーとも相談したうえで検討していく。また、感染リスクを抑えてプログラムを実施するための段取りや、基本的な注意事項等を確認することが出来たので、今後の対面式プログラム実施する際の参考としたい。

<p>学生の声</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ拾いに他の意図を込めて活動してらっしゃることに一番感銘しました。また、ステキなボランティアサークルであることが知れて嬉しかったです ・温かい雰囲気ですごく楽しかったです ・ゴミ拾い自体も、普段は目につかないようなところに気を配ってゴミを見つけるという良い経験ができました ・今回の活動に参加して、友達を作ること、青山学院の雰囲気を感じることに、ゴミ拾いのボランティアを経験することが同時にできたのでとても良かったです ・ゴミ拾いを行った後、街に落ちているゴミが目が行くようになったので、日常生活でも同じように拾って捨てるという行動を行いたいと思います ・今までボランティアを難しく考えていましたが、楽しく参加することができました ・分別とコミュニケーションが同時にでき、よかったですと思いました。ありがとうございました ・青学の周辺で活動して、青学生になった実感が湧いて嬉しかったです
<p>共催団体</p>	<p>青山学院大学学友会公認愛好団体グリーンバード青山学院大学ゴミ拾い愛好会</p>
<p>協力団体</p>	<p>渋谷区環境政策部環境整備課</p>



キャンパス周辺をゴミ拾い



ゴミ拾いを通じて学生同士の交流を深めました

事業名	手話コミュニケーション講座
日時	1日目：11月4日（水）15:00～17:00 2日目：11月11日（水）15:00～17:00 3日目：11月18日（水）15:00～17:00
実施場所	青山キャンパス 17号館 17511 教室
参加者数	1日目：27名（うち受講者19名、手話部8名） 2日目：28名（うち受講者18名、手話部10名） 3日目：22名（うち受講者15名、手話部7名）
内容	前半は手話教室華乃樹の講師による手話表現や、ろう者とのコミュニケーション方法をレクチャーいただき、後半は手話部による手話歌やジェスチャーゲーム等のレクリエーションで参加者同士が交流を深める機会となった。 1日目：講義（手話概論、難聴の分類、コミュニケーション手段、手話の種類等）、手話基礎表現練習、手話部によるレク「ヌメロン」 2日目：基礎的手話表現の練習、日本手話と技法の解説・練習。手話部によるレク「手話歌を覚えよう！」 3日目：ろう者との交流、手話単語の復習・練習。手話部レク「ジェスチャーゲーム」
成果	参加学生によるアンケート結果から、講座内で学んだ手話表現の全てが身につくところまでにはいかなかったという声もあるが、一方で手話部によるレクに関しては、参加者同士で盛り上がる様子が見られ、学生目線での企画立てによる成果と考える。全3回の連続講座に関わらず参加者も多く、次年度も継続し手話を題材とした障がい理解と参加者同士の交流が深められる企画としたい。
学生の声	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍でもキャンパスに足を運び、対面で学べたことができ嬉しかったです。 ・最終回は講師の方と手話でコミュニケーションを少しとることができたので、1番印象に残りました。 ・手話部の方が考えてくださったレクリエーションがどの回もとても楽しかったです。
協力団体	手話教室 華乃樹、青山学院大学学友会文化連合会手話部



手話単語の練習



ろう者講師とコミュニケーション



みんなで I love you の手話

事業名	自然体験プログラム
日時	11月21日(土) 10:00～16:00 援農ボランティア 12月5日(土) 10:00～12:00 里山保全ボランティア
実施場所	援農：東京地球農園（東京都あきる野市） 里山保全：なな山緑地（東京都多摩市）
参加者数	援農：9名 里山保全：10名
内容	比較的感染症リスクが低いと思われる屋外ボランティア活動を2回にわたり実施した。現地集合現地解散だったため参加者との事前連絡にはLineのオープンチャット機能をコミュニケーションツールとして活用した。
成果	参加学生の所属学部はコミュニティ人間科学部の学生が一番多く（4名）、経営学部が続いた。また実施場所の影響か援農の参加学生は相模原キャンパスの学生が多く、里山保全は青山キャンパスの学生が多かった。学年別では2年生（8名）、1年生（4名）、3・4年生（それぞれ3名）に加え、大学院生の参加もあった。男女比は8：11。 事後アンケートからも参加学生たちの満足度は非常に高く、今後も意欲的にボランティア活動に参加したいという回答が多かった。一方、屋外活動であったため天候が活動の質に大きく作用した。援農時には晴天であったが、里山では霧雨が降っており、本プログラムの目的である「学生間交流」を行うことが出来なかったため、達成度は半分程度となった。次回からは体験後のシェアリング部分を拡充するようプログラム構成の改善が求められる。
参加者の声	<ul style="list-style-type: none"> ・新鮮な野菜を素焼きにして食したことが印象深かった ・大変な作業も力を合わせ早く終わらせることが出来た ・目的ある人もなんとなくの人も、まじめに取り組んでいた ・都内で大自然を味わえた ・人間社会と里山との関係を学ぶことができた ・数多くの植生植物を観察することができた



農園体験の様子



農園で集合写真



里山保全活動の様子



みんなで集合写真

オンラインボランティア

事業名	オンライン なかよしダンスプロジェクト
日時	1回目：9月6日（日）14:00～15:00 2回目：10月25日（日）13:30～15:00 3回目：12月20日（木）14:00～15:00 4回目：3月28日（日）13:00～14:00
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	学生ボランティア7名
内容	渋谷区で障害児のディサービスを行う NPO 法人なかよしぐるーぷに通う子どもたちが、コロナ禍でも楽しめる活動を支援する目的に、学生ボランティアがダンス動画を作成して提供。子どもたちがディサービスの中で踊りを楽しむこと、また、日曜日の活動時間では、オンラインで学生が子どもたちと交流を行う企画を実施した。10月の交流回は、ハロウィンお楽しみ会として、フェイスシールドに飾り付けをする工作を学生がリモートでファシリテートし、12月の交流回では、クリスマス会のなかで学生が作ったクリスマスソングのダンスを踊って交流を行った。3月の交流会では進学、卒業のメッセージを子どもたちと学生が相互に送り合う会を実施した。
成果	通常のキャンパスライフがなくなった学生が、リモートでもできるボランティア活動として一つ形にすることができた。ダンス動画を2つ作成（ドラえもん、ジングルベル・ロック）し、子どもたちの学齢や障害の状態、ニーズをスタッフの方にヒアリングするなかで完成し、大変喜んでいただけた。特に中学生以上の子供たちにとっては大学生との交流が喜ばれた。学生ボランティアにとっては、ダンス動画作成自体にも興味があり完成度の高いものを提供することができた。

事業名	カンボジア オンライン日本語サロン
日時	1回目：9月16日（水）、2回目：10月22日（木）、3回目：11月19日（木）、4回目：12月17日（木）、5回目：2月4日（水）、6回目：3月22日（月）
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	学生ボランティア4名
内容	NPO 法人 Globe Jungle がカンボジアでの教育支援事業として行っているフリースクールで働く教員の方々に対して、学生ボランティアがオンラインでの日本語会話レッスンを通して異文化交流を行う。これまでスタディツアーなどで日本人との交流の機会を大切にしていた教員の方々が、コロナ禍で行き来が制限されるなかでも日本語や日本文化との接点を継続していきたいというニーズに応えるものであり、学生ボランティアにとっては、リモートでの国際協力活動を試みる機会となっている。
成果	カンボジア現地での日本人スタッフのサポートもあり、現地の教員の方々は楽しみにしてくれている。学生ボランティアは毎回、英語とクメール語、写真やイラストを交えながら楽しんで日本語会話の練習ができる教材やカリキュラム作りを行っている。学生2名と試験的に始めたものであるが、メンバーも増え継続的な活動となっている。

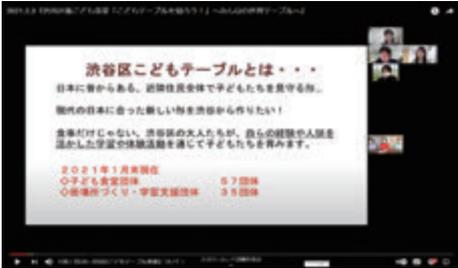
イベント

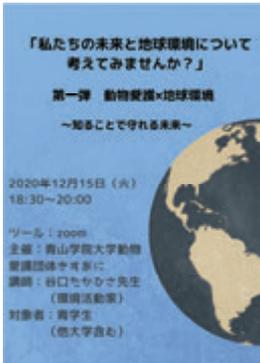
事業名	オンライン ボランティアカフェ（青山キャンパス）
日時	1回目：7月29日（水）、2回目：9月28日（月）、3回目：10月14日（水） 4 & 5回目：11月4日（水）、20日（金）、6回目：12月10日（木） いずれも 12：35～13：15
場所	オンライン（WebexまたはZoom）
参加者数	1回目：19名（うち教職員2名）、2回目：14名、3回目：13名（うち教職員1名）、4 & 5回目：2名、6回目：0名
内容	<p>ボランティアには興味があるけど、なかなか参加の一步を踏み出せない学生向けに、社会課題に取り組む団体・個人の体験談を語ってもらうオンラインイベントとして実施。テーマとゲストスピーカーは次の通り。</p> <p>1回目：「動物保護」学生団体きすあに 2回目：「被災地復興と地域活性化」学生団体 Youth for Ofunato 3回目：「 Bangladesh の教育支援」国際協力 NGO アジアキリスト教教育基金 4 & 5回目：「オンラインチームながぐつプロジェクトとは」日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo） 6回目：「すべての子どもたちに“笑顔を届ける”ためには」僕らの夏休み Project 青学支部</p>
成果	<p>初回はオンライン開催ということもあり、どれだけの学生が関心を示してくれるか手探りであったが、所属キャンパスに関わらず様々な学部学科の学生から申し込み、参加があった。オンラインという形式上、質問しづらい雰囲気懸念されたが、わずかな時間にも関わらず活発な質疑応答が行われた。</p> <p>しかしながら、後期に入り課外活動が緩和されたためか回を重ねるごとに申し込み数が減少傾向にあった。11月は同内容を2回開催し、それぞれ参加者1名であったが途中クイズや対話を交えながらのアットホームなボラカフェとなったが、12月の回は残念ながら参加者がいなかったため代替案としてボラカフェの内容を録画し、「ボラカフェ アーカイブ」としてYouTube上で公開することとした。</p> <p>当日の内容の一部をボランティアセンター Web サイトにて配信を行った。</p> <p>前編：https://youtu.be/mxg5HkWHRh4 後編：https://youtu.be/wL9BdOZxbCk</p>
	

事業名	オンライン ボランティアカフェ（相模原キャンパス）
日時	1回目：11月17日（火）、2回目：12月16日（水） いずれも12：35～13：15
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	1回目：5名、2回目：2名
内容	ボランティア関心層を対象とした気軽に参加できるランチイベント。 各回のテーマとゲストスピーカーは以下の通り。 1回目：『地域ボランティアを覗いてみよう：「つながる場」を形づくる声、声、声』 相模原市社会福祉協議会 2回目：「青学生が大活躍?! 災害時のボランティア活動について」（ボランティアセンター相模原キャンパス）
成果	オンライン形式を採用することで、これまでボランティアカフェで実施してきた内容を学生へ届ける事は可能となったが、開催中はビデオ画面をオフにして参加する傾向が強く、双方向のコミュニケーションについては工夫が必要であると感じた。次年度においても引き続きオンラインでの開催が続くことを視野に入れて取り組んでいきたい。
	

事業名	オンライン 国際協力キャリアのリアルに迫る！
日時	1回目：12月16日（水） 18:30～19:30 2回目：12月18日（金） 10:00～11:00
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	1回目：5名、2回目：6名
内容	コロナ禍で海外での活動が制限される中で、国際協力でのキャリアや活動現場について関心がある学生を対象としたイベントとして実施。企画内容の検討や当日のファシリテーションを学生ボランティアと協働。各回、カンボジアでの女性自立支援や教育活動を行っている NPO 法人 Globe Jungle のスタッフ 2 名によるプレゼンテーションと参加者からの質問に答えるセッションで実施した。
成果	少人数での実施となったが、参加者各人が質問や感想を述べ合う時間が確保できたことによって、実質的には参加者、ゲストともに充実した場となった。また、企画をした学生ボランティアにとっても、ゲストとのやりとりや当日の段取り、資料作成、ファシリテーターとしてのスキルなど、自発的な思いに基づく企画づくりと運営ができる機会となった。

事業名	こどもテーブルボランティア参加者交流会
日時	12月16日(水) 12:30～13:20
場所	ボランティアセンター&オンライン (Zoom)
参加者数	5名(1名オンライン)
内容	「渋谷区こどもテーブル」にボランティアとして参加した学生同士の交流会を対面とオンラインのハイブリッド形式で実施。参加者同士がどのような団体でどのような活動をしたかを報告し、その中での気づきを共有する場となった。
成果	参加学生からは、ボランティアに参加している中で、貧困世帯のこどもがこどもテーブルに参加できていないという気づきと、本当に支援を必要としているこどもたちへの情報発信が不足していることを課題として指摘し、学生たちの力で取り組めることをその場の参加者で考えるきっかけとなった。その後、参加したメンバーにて学生によるこどもテーブルの魅力を発信するボランティア学生団体の立ち上げへと発展した。

事業名	渋谷区版こども食堂「こどもテーブル」を知ろう！
日時	第1回：9月5日(土) 15:35～16:25 第2回：2月3日(水) 12:30～13:30
場所	オンライン (Webex、Zoom)
参加者数	第1回：13名、第2回：33名
内容	渋谷区社会福祉協議会が運営主体である「渋谷区こどもテーブル」の事業紹介とこどもテーブル団体による活動紹介を含めたオンライン企画を実施。 第1回：NPO法人あーすりんく 「こどもテーブル渋谷のラジオの教室」「こどもテーブルゆめとぴあ」 第2回：みんなの世界テーブル それぞれの回で、渋谷区こどもテーブル事業の説明とこどもテーブル団体立ち上げのきっかけや活動紹介、コロナ禍での取り組み等お話いただいた。また、第2回ではボランティア活動に参加した学生の体験談も語られた。
成果	オンラインイベントとしてどれだけ学生の参加があるか懸念していたが、両回共に想定以上の申し込みと参加があり、学生にとって関心の高いテーマであること、そしてオンラインによる参加のしやすさが見受けられた。 当日の学生の質問やアンケート結果からは、コロナ禍でこどもたちをどうサポートしていくか、どのような活動が今できるかなど、こどもテーブル団体の方から直接話を聞いたことが学びとなったという声が多い。 イベント後、参加した学生からこどもテーブルでのボランティアの希望が数件入り、希望する団体へ繋げることができた。 当日の内容の一部をボランティアセンター Web サイトにて配信を行った。 第1回： https://youtu.be/HQN38aBeB0g 第2回： https://youtu.be/NFvsy0db4Wc
協力団体	NPO法人FILMe*Earth*あーすりんく「桜丘こどもテーブル」「ゆめとぴあ」 みんなの世界テーブル
	 

事業名	オンライン講演会「私たちの未来と地球環境について考えてみませんか？」
日時	1回目：12月15日（火）18：30～20：00 2回目：1月20日（水）18：30～20：00 3回目：2月16日（火）18：00～20：00
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	1回目：20名、2回目：45名、3回目：62名
内容	<p>ボランティアセンターに登録する学生団体「きすあに」が企画するオンライン講演会の実施協力を行った。</p> <p>講演会は3回シリーズで、アニマルウェルフェア（動物福祉）×〇〇をテーマとして設定し、毎回異なるゲスト講師にお話しいただいた後、私たちの日々のライフスタイルについて意見交換を行った。一人でも多くの人にアニマルウェルフェアについて、そして関連する身近な社会問題を知ってもらいたいというメンバーの思いから、参加対象枠を他大学や社会人にも広げたこともあり、多くの人に参加してもらうことができた。</p> <p>1回目 動物愛護×地球環境 （ゲストスピーカー：環境活動家 谷口たかひさ氏）</p> <p>2回目 食べ物×アニマルウェルフェア （ゲストスピーカー：アニマルウェルフェア畜産協会 今野洋氏）</p> <p>3回目 動物愛護×スポーツ （ゲストスピーカー：ヴィーガンアスリート 安彦考真氏）</p>
成果	コーディネーターが随伴する形でのイベント実施であったが、企画・運営側のきすあにメンバーの成長が著しく、回を重ねるごとに広報や当日の進行スキルが向上していった。また、同じ目標を目指すことにより、団体内の団結力や取り組む課題に対する知識力、イベント運営のノウハウ等が蓄積され、学生にとっても大きな自信に繋がった。
主催団体	動物愛護学生団体きすあに
協力団体	日本財団学生ボランティアセンター
きすあにメンバーの所感	<ul style="list-style-type: none"> 全3回の講演会を通して、動物愛護について身近に感じていただくことが出来たのではないかと思います。「食」や「健康」などという身近なことからのアプローチで、動物愛護に興味のない人からも関心を得るために、楽しく学ぶことのできる講演会をこれからも開催していこうと思います。 これまでの講演会を通して、私が軸にしていたことが、「動物に対する様々な価値観を多くの人に理解してもらおう」という事で、講演会に参加した方から、「考え方が変わった」「他の価値観も理解できた」という声を頂き、講演会を続けてきて良かったと思いました。今後もこうした動物に対する価値観の変革を多くの人に起こしてもらえるように講演会やSNSでの活動を通して行っていければと思います。
	  

講座・セミナー

事業名	国際協力プランナー入門
日時	1日目：9月9日（水）、2日目：10日（木）10：00～17：00
場所	オンライン（Google Meet）
参加者数	23名（申込40名、定員24名）
内容	<p>2019年度から実施している国際協力プロジェクトを企画するための座学と実践的ワークショップを組み合わせた2日間の研修を今年度はオンライン形式で開催した。</p> <p>実施に先立ち研修の特設サイトを開設し予め講義資料や参加の手順、オンライン学習環境に関するQ&Aなどを受講者に案内した。</p> <p>2日間のカリキュラムではイントロダクションからグループワーク、ゲスト講師の講義を経て再びグループで作成したアクションプランを発表するまでを一連のプログラムとし、予定したカリキュラムを修了した学生には修了証を発行した。</p>
成果	<p>今年度は国際協力だけでなくSDGs（持続可能な開発目標）を基軸に国内問題にも興味がある学生にも関心を持ってもらえるような広報に努めた。その効果からか夏期休暇の後半にもかかわらず定員を上回る学生から応募があった。昨年度の実績から当日のキャンセルが懸念されたが、志望動機を優先して選考を行った結果、参加率の向上に繋げることが出来た。</p> <p>なかにはネット環境から安定した接続を確保できずに途中で退室せざる得ない学生もいたが、全体的には学習意欲の高い学生が集い、ゲストスピーカーの講義や国際協力の現場で活躍するファシリテーターの体験談に熱心に耳を傾けつつ、活発なグループワークを行い、アイデア満載なアクションプランを作り上げることが出来た。研修終了後も数名の学生が残り、国際協力業界でのキャリア形成に対しファシリテーターが相談にのるなど、実践面で有意義な研修となった。</p>
共催団体	特定非営利活動法人 GLM インスティテュート
学生の声	<p>長年関心があった国際協力を考えながら学びたいと思い、今回プログラムに参加させていただきました。実際にグループでアクションプランを作る中で、「途上国の子供たちが学校に通えない」という問題一つをとっても、健康面や経済状況、インフラ不足など多くの問題が複雑に絡みあっており、それらをプロジェクト化する難しさを体験しました。またUNIQUEASEの代表である中村八千代氏のお話をお聞きして、ソーシャルビジネスを含む持続可能な新しい国際協力の形にも大変関心を抱きました。</p> <p>フェアトレード商品を購入するなど途上国のために日頃から自分にできることを模索すると共に、社会人になっても持続可能な国際協力の在り方を考え続け、体現したいと思います。</p> <p style="text-align: right;">国際政治経済学部国際経済学科 4年 数実 奈々さん</p>

学生の声	<p>幼い頃からストリートチルドレンの存在を目の当たりにしていた私は発展途上国や貧困国に対する関心がありました。そのため、これからの国際社会を担っていく一員として、実際に多くの学生と交流し意見を分かち合いたいという強い意志がありこのプログラムの参加を決意しました。</p> <p>SDGsの目標をもとに作成したアクションプランは自分たちの知識と能力を最大限に活かす場となり、他の生徒たちの多種多様な考え方を知る機会となりました。また、三人のゲストにお越しいただいて、目的は同じであれ全く異なる国際協力の在り方やアプローチの方法を学ぶことができました。コロナ禍であってもオンラインを通して貴重な体験をできたことに感謝し、ここで培った教養を将来に活かし活躍できる者となるために努めていきたいです。</p> <p style="text-align: right;">国際政治経済学部国際経済学科 1年 森下 優利奈さん</p>
-------------	---



事業名	ユニバーサルマナー検定3級
日時	9月30日(水) 18:30～20:30
場所	オンライン (Zoom ウェビナー)
参加者数	45名
内容	高齢者や障がい者等何らかの支援が必要な人へのさりげない接し方や、「障害」とは何か等を講義と事例検討を通してマインドを学んだ。今年度はオンラインでの開催とし、受験者には受験料の一部補助を行った。
成果	昨年度同様に募集開始直後から多くの申し込みが入り、学生の関心の高さが窺えた。一方、受験者に対して実際の活動先の案内を行うも、参加希望や問い合わせは現状なく、活動への発展へ繋がるプログラム作りの必要性を感じた。
学生の声	<ul style="list-style-type: none"> 障がい者の方と接するとき何が正解かを知りたくて参加しましたが、そもそも正解はなく、それぞれが求めているサポートをすることが重要であり、自分の考えを改めることができた。 基本的な声掛けフレーズ、オストメイトマークなどを知ることができ、今後自分の行動に生かしていけることを多く学べました。
共催団体	株式会社ミライロ 一般社団法人ユニバーサルマナー検定協会

事業名	認知症サポーター養成講座
日時	相模原市版：10月27日（火） 渋谷区版：10月28日（水） いずれも18：30～20：00
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	相模原市版：14名 渋谷区版：15名
内容	認知症を正しく理解し、認知症の方とその家族の方たちの応援者である「認知症サポーター」になることを目指す講座。全国キャラバン・メイト連絡協議会から講師を派遣してもらい実施する共催事業で、今年度で2年目となる。相模原市版と渋谷区版でそれぞれ開催し、どちらの講座でも前半は認知症の基礎知識を学び、後半はそれぞれの地域で現状や取り組みの説明がされた。また、講座ではZoomのブレイクアウトルームを利用し、参加者同士のディスカッションも行った。
成果	運営側のオンラインによる企画の不慣れさはあったが、大きなトラブルもなく実施できた。受講者アンケートでは「オンライン実施のため受講した」という学生が過半数を越えており、オンラインによる参加のハードルの低さがあることも見受けられた。 また参加動機や受講後アンケートでは「親族が認知症のため学びの必要性がある（あった）」という回答もあり、認知症というテーマに現状の課題感を抱えている学生へのアプローチにもなった。 参加者からは “（認知症に対する）考え方が変わる機会となりました” “コミュニケーションの機会を増やして認知症に向き合っていきたい” “ボランティアする側、される側という考え方ではなく、お互いに助け合うという考え方が良いなと感じた” など感想が寄せられ、本講座を通して認知症に対する理解が深まり、ボランティアへの考え方にも変化が見られた。
学生体験談	認知症の症状や認知症の人との接し方について学びたいと考え参加しました。認知症サポーター養成講座では、動画をもとにしたグループワークや講師の方のお話を通じて、認知症の人がどう感じているのか、私たちがどう接するべきかを具体的に学ぶことが出来ました。そして、認知症サポーターは特別な何かをする人ではなく、「認知症について正しく理解し、認知症の人や家族を見守る応援者である」ということを学び、自分の身近にも実践できることがあると知りました。日頃のコミュニケーションを大切にすることや、相手の目線に合わせることなど、今回の講座で学んだことを生かして、これから、認知症サポーターとして自分に出来ることを実践していきたいと思います。 <p style="text-align: right;">文学部日本文学科1年 福井 咲希さん</p>
共催団体	全国キャラバン・メイト連絡協議会
	 

事業名	あすチャレ！ Academy
日時	12月2日（水）15:00～16:30
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	7名
内容	現役パラアスリートの山本恵理氏による障がい理解のレクチャーにて、障がいのある方への対応やコミュニケーション方法を学び、グループワークを通じて参加者同士が日常の場面を想定し配慮ある行動の意見を交わした。
学生の声	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が声をかけることが障害のある方の選択肢を増やすことに繋がると分かり意識が変わった。 ・パラリンピックのかっこよさが伝わった。
協力団体	日本財団学生ボランティアセンター Gakuvo
プログラム提供	日本財団パラリンピックサポートセンター

事業名	ヒューマンライブラリー入門講座
日時	12月18日（金）13:00～14:30
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	4名
内容	次年度でのセンター事業として予定している青山ヒューマンライブラリーのプレ企画として、東京ヒューマンライブラリー協会代表「坪井 健」氏を講師とし、オンラインによるヒューマンライブラリー入門講座を実施。ヒューマンライブラリーの内容や効果、開催事例や開催方法などを講義いただいた。 参加学生には本学でのヒューマンライブラリー実施に向けての運営協力を呼びかけた。
成果	参加学生の事後アンケートでは、 “カテゴリーでしか人を判断出来なかった参加者が読者として、本を対人として捉えることができる魅力を知った。今後開催される際はぜひ参加してみたいと思う。” など、ヒューマンライブラリーの取り組みによる効果の理解や参加意欲につながった。本講座はあくまで入門講座であるため、受講者が実際に参加できる機会を今後提供していきたい。また、センターで実施を予定するヒューマンライブラリーでは参加学生に司書として運営に協力を担ってもらうことを期待する。
共催団体	一般社団法人東京ヒューマンライブラリー協会

事業名	学生×子どもの居場所づくりセミナー
日時	3月26日（金）18:30～20:30
場所	オンライン（Zoom）
参加者数	青学生13名
内容	<p>子どもの遊び場や無料学習、コロナ禍の食糧支援活動の行なっている学生3団体をゲストスピーカーとして招き、活動現場の生の声を聞きながら、学生がつくる子どもの居場所について理解を深めた。</p> <p>【事例報告の団体（ゲストスピーカー）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あすのち（副代表 三浦寧久さん） ・こども広場ウェルカム（学生代表 豊田大登さん） ・かながわ学生ボランティア連合（井ノ上誠也さん）
成果	相模原市社会福祉協議会が取り組んでいる子どもの居場所づくり支援事業について、昨年度に引き続きボランティアセンターとして協力する形式で実施した。オンラインでの実施体制が整い、開催の目途が立ったのが年度末であったため、参加申込（広報）が気になったが、結果としては昨年度を上回る参加となった。
参加者の声	<ul style="list-style-type: none"> ・とても参考になりました。行動に移してみたいと思います。 ・普段知る機会のない、意思のある学生さんに出会えてうれしかったです。 ・学生でも1人の人間として相手に寄り添える存在でありたいと思いました。 ・なかなか踏み出す勇気がありませんでしたが、今回のセミナーを聞いて、自分にも気軽に参加できそうな活動がたくさんあり、是非参加してみたいと思いました。
主催団体	相模原市社会福祉協議会中央ボランティアセンター



サービス・ラーニング科目への協力

青山スタンダードの科目として開講されている、サービス・ラーニング科目に対して、ボランティアアセンターでは、主に科目の紹介・広報、地域での活動受け入れ先との連携・コーディネーションを行った。新型コロナウイルスの影響によって、前期科目が後期に延期開講、対面からオンライン授業への切り替え、活動先の変更や限定的な活動参加など、様々な点において予定や形態を変更しての実施となった。

【2020年度 サービス・ラーニング科目の実施概要】

サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 後期に延期実施）

サービス活動とは何かを学んだ上で、3つのNPO団体のゲストスピーカーの講義と活動参加を通して、社会課題に取り組む現場への理解を深めた。フードバンク、地域子ども支援、アジア・アフリカからの農業指導者研修の活動の中から活動に参加した。

サービス・ラーニングⅡ（青山キャンパス 後期実施）

社会の課題をビジネスの手法で解決することを目指すソーシャルビジネス（社会的企業）をテーマに、問題解決へのアプローチについて学んだ。実際に取り組んでいる3つの団体・企業からのゲストスピーカーの講義と、学外での活動を通して理解を深めた。

サービス・ラーニングとしてのボランティア活動（青山キャンパス 後期に延期実施）

渋谷の街をフィールドにSDGsとは何かを学び、防災と食の問題、社会的弱者支援、地域コミュニティの持続について取り組んでいる団体での活動に参加した。都市の生活に密着したテーマを掘り下げ、身近なところでの問題解決のアクションにつなげる試みを行った。

サービス・ラーニングⅠ（相模原キャンパス 夏期集中）

「被災地に学ぶ」をテーマに、東日本大震災で被災した岩手県宮古市での活動を予定していたが、宮古市と大学との協働でのリモートコンサートとシンポジウムに計画を変更して実施した。また、豪雨災害で被災し救援活動を行った熊本県の学生を交えてのディスカッションを行った。

サービス・ラーニングⅡ（相模原キャンパス 春期集中）

岩手県宮古市での活動を行う予定を変更し、国立療養所多摩全生園への訪問を中心としたプログラムを行った。ハンセン病の歴史を学ぶとともに、社会的な差別や困難をかかえてきた人たちの思いから、今後の社会形成において重要な視点を身近なところから考えていくことを行った。



外部との連携・協力等

事業名	共和中学校福祉講座
日時	12月1日(火) 13:50～15:00
場所	相模原市立共和中学校
内容	相模原市立共和中学校にて開催された福祉講座(「講話・体験学習の日」)に講師として参加し、ボランティアについて理解を深める内容の講座を30名の生徒へ向けに行った。
連携・協力先	相模原市立共和中学校

事業名	大泉西中学校 SDGs インタビュー
日時	2月17日(水) 10:30～11:00
場所	オンライン (Zoom)
内容	東京都立大泉西中学校2年生の「総合的な学習の時間」の一環であるSDGsに取り組む企業へのインタビューにおいて、ボランティアセンターとしてのSDGsの取り組みや姿勢について説明した。
連携・協力先	東京都立大泉西中学校

事業名	アウトサイダー・アート・プロジェクトとの協働
内容	優れた芸術的な才能を持つ、障害のある方への支援の一環として金沢市が取り組んでいる「アウトサイダー・アート・プロジェクト」との協働として、ボランティアセンターでは、アーティストの創作活動や自立のための仕組み作りへの寄付となるペーパーコースターを紹介しています。今後は学内購買会での販売を行っていきます。
連携・協力先	金沢市福祉健康局



OUTSIDER ART PROJECT <https://kanazawart.com/>

事業名	藤野プロジェクト
場所	相模原市緑区（藤野地区）
内容	藤野総合事務所にて開催された「(仮称)テレワークセンター空間等検討ミーティング」に参加。藤野地区では地方移住やリモートワークといった社会のニーズに応える取り組みを積極的に進めている。同地域（相模原市）にキャンパスを置く大学として、地域連携や市民としての協働といった側面から、学生が地域の課題解決や活性化に取り組めるプロジェクトを2021年度に実施する予定。
連携・協力先	一般社団法人藤野観光協会ほか

事業名	渋谷区こどもテーブルボランティア
日時	通年
場所	各こどもテーブル活動先
参加者数	17名（2020年4月～2021年3月統計）
内容	渋谷区社会福祉協議会が実施する「こどもテーブル活動助成」を活用した活動先14か所に対する学生ボランティア募集の告知協力と連絡調整を行った。 <活動紹介先> ・なつつの木 ・代々木こどもテーブル～春の小川～ ・美竹の丘こどもテーブル ゆめとぴあ ・パール子どもテーブル活動 ・恵比寿じもと食堂 ・上富ダイニング ・Mama's kitchen ・子どもと一緒に遊び隊 ・なな色カフェ ・おんがく な・か・ま ・こどもテーブル 渋谷のラジオの教室 ・みんなの世界テーブル ・恵比寿ママ食堂 ・みんなの食卓
連携・協力先	渋谷区社会福祉協議会



4. 学生スタッフ企画プログラム

学生スタッフ Roote について

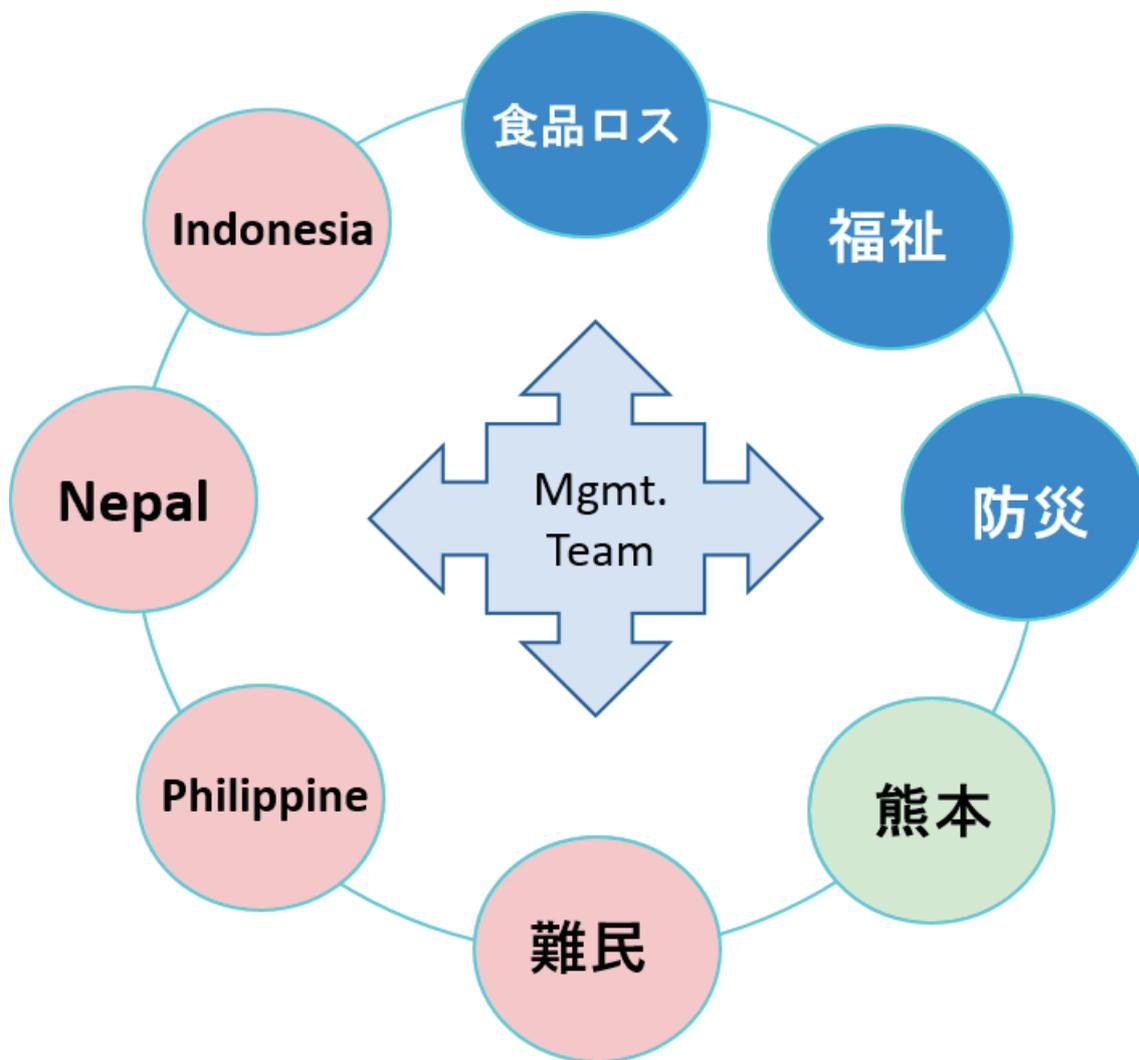
【Roote のビジョン】

社会問題に対して自ら行動できる青学生を増やし、すべての人々が助け合える社会を目指します。

【Roote のミッション】

社会問題に関心がある青学生と、ニーズを抱える社会をつなぎ、一人ひとりの思いを行動に変えます。

【Roote 組織図】



学生スタッフ Roote 全体報告

【今年度について】

2020 年度学生スタッフ Roote では新型コロナウイルスの感染拡大を受け、学生スタッフの安全を第一に考慮し、前期中は各プログラムの企画の実施、その他の課外活動を停止した。その期間はこれまでの活動を振り返り、アフターコロナ時代に向けた新しい活動を企画するとともに、各プログラムが行うボランティア活動やターゲットについて学びを深め、今一度プログラムの目的を見つめ直す期間とした。後期においては感染拡大の事態は収束へ向かわない状況下で、オンラインで可能な範囲に限定した活動を再開した。「コロナ時代」を受容し始めている現状に合わせて「アフターコロナ」ではなく「ウィズコロナ」をテーマに掲げた。コロナ禍において、これまでの各プログラムが支援あるいは協力してきた人々がどのような変化をしたのか、どのような新しいニーズがあるのか、それに対して自分たちには何ができるのかを起点として、各プログラムが新しい方針で企画を開始した。

年度を通して、フィールドでの活動はできなくとも、各プログラムが SNS にてターゲットやカウンターパートに関する情報発信を継続的に行った。コロナ禍で団体内での連絡手段や活動内容に大きな変化が生じたが、少しずつオンラインでの活動にも慣れ、来年度以降のコロナ時代におけるボランティア活動に向けて大きな一歩となったと考える。

【今後の展望】

今後はマネジメントチームを中心に、各プログラムスタッフが参加できる機会を多く持ち、団体の結束を高めていきたい。また、授業が対面で実施されるなど、徐々に生活様式が「コロナ以前」のものに戻っていくとしても、今年度に得た知見を活かして「コロナ時代」を受容していく社会に適応した新しいボランティアの形を模索したい。

熊本プログラム

令和 2 年九州豪雨支援金募金

活動場所：Twitter や Instagram などオンライン上での呼びかけ

活動期間：8 月 3 日（月）～ 10 月 3 日（土）

支援金送金先：日本財団「災害復興支援金特別基金」

募金総額：54,000 円



【活動内容】

令和 2 年 7 月に発生した九州豪雨。災害発生直後我々は現地へ支援活動したかったが、新型コロナウイルスの影響により現地に行くことを断念し、オンライン上での呼びかけを行う事ができる支援金募金を行った。学内ポータルや SNS などから定期的に募集をしたことで、青学生や青学職員の方々などの寄付をいただき、予想していた募金額を超えることができた。また我々熊本プログラムメンバーとしても、コロナ禍でもできる支援方法があることに気づくことができた。

【今後の展望】

本年度は新型コロナウイルスの影響で、「ブランディング」の活動が思うように進まなかった。しかし来年度は例年開催している熊本 WEEK を規模縮小し開催する予定である。また 2021 年は熊本地震が発生し 5 年目になる年だ。熊本地震の風化を防ぎ、なおかつ復興支援の一助となるような活動を手掛けていきたいと考えている。

福祉プログラム

【活動内容】

今年度は新型コロナウイルスの影響の中、自分たちにできることを模索する日々が続いた。その中で、メンバー内で一つにまとまったことが、コロナ禍で障がいのある人々が感じている困難や不自由さを発信していきたいという思いである。障がいのあるなしに関係なく、誰もが今まで通りの生活を送ることができずに不自由な思いをする世の中となり、そうした状況だからこそ障がいのある人々が感じている困難な事もきっと共感してもらいやすいだろう、と考えたためである。そして、その困難・不自由さを「知る」という活動として、障がいのある人々へのアンケート調査を実施し、「発信する」という活動としてSNS（Twitter及びInstagram）による投稿を行った。

アンケート調査では「コロナ禍において障がい者が抱える困難および生活状況の変化への実態把握アンケート」と題し、様々な回答を当事者の方やそのご家族からいただき、私たちが気付かなかった視点を学ぶことができ非常に参考になった。

SNSでの発信においては、外部機関が実施した調査や当事者の声が掲載された記事を参考に、イラストを用いてわかりやすくまとめた画像を作成して投稿した。加えて、先述のアンケート調査で得られた回答の紹介も行った。投稿を見てくださった方から「勉強になる」という反応もいただき、伝えたい情報を届けられているという実感を得られた。

以上の2つの活動により、障がいのある人々のコロナ禍での生活状況について、自分たちが「知る」という点と、その知った情報を「発信する」という点とを踏まえたアプローチを行った。

【今後の展望】

今後は、上記の「知る」と「発信する」のその先に力を入れた活動として、青学生に向けた「障がいについて考えるオンライン・ディスカッション」というイベントを企画している。私たちが知って発信した情報を学生が知り、さらにその先のステップとして知った事例について「考える」機会を設けることで、学生がより障がいのある人々に寄り添った思考をもつことができると考えている。

Instagram : @rootefukushi

Twitter : @RooteFukushi

難民プログラム

難民オンラインディスカッションプロジェクト

活動場所：オンライン（Zoom）

活動日時：12月14日（月）6限

活動人数：8名（学生スタッフ6名、参加者2名）

【活動内容】

当初は入管訪問とオンラインディスカッションを企画していたが、入管訪問は2021年1月に発令された緊急事態宣言により中止とした。オンラインディスカッションの前半部分では、他国との比較を通して日本の難民受け入れ状況を参加者と共有し、後半部分でディスカッションを行った。ディスカッションのテーマは「難民受け入れのメリット・デメリット」「難民とどう共生するか」の二つで、日本の難民受け入れの将来について意見交換ができた。

対面での活動が出来ない中、オンラインでミーティングを重ね企画が実施できたのが良かった。当日、一般学生と意見交換することが出来たことももちろんだが、準備やリハーサルの段階で、学生スタッフ同士が情報共有し、難民問題について改めて話し合い認識を合わせることが出来たのも

貴重な時間となった。ただ、オンラインでの企画立案の難しさ、一般参加者の集め方、またターゲットの設定の難しさを感じた。

【今後の展望】

来年度は、今年中止となった入管訪問を軸に活動していく。また、入管訪問の準備段階で参加者と勉強会し講演会を開くことで、仮にまたコロナウイルスの影響で入管訪問が中止となっても参加者が何も得ずに終わるということを防ぐことができる。

食品ロスプログラム

【活動内容】

今年度は学内での食品ロスの認知活動を行うことができなかった。コロナ禍でキャンパスでの活動が制限される中、私たちが食品ロスについて青学生にどのような活動や支援を行うことができるのかをメンバーと議論した。また、メンバー間で食品ロスに関する情報共有や意見交換を行い、メンバー間でも食品ロスに関する知識を深めることに努めた。

1 Instagram で青学生に向けた情報発信

Instagram の食品ロスアカウントで青学生に向けて情報発信を行った。新型コロナウイルスの影響で悪化している食品ロスの現状、家庭で実践できる食品ロス削減貢献、昨年行った活動内容などを紹介した。そして青学生に役立つような情報をピックアップして Instagram を通じた情報発信を行った。

2 青山学院高等部 Aoyama Second Chance との合同ミーティング・意見交換

今後の活動の参考にすることを目的として青山学院高等部 Aoyama Second Chance と合同ミーティングに寄付を検討、家庭で廃棄する予定の食材を高等部生から集めて支援団体に寄付といった斬新的な活動を行っており、大きな刺激を受けた。食品ロスメンバーが昨年まで行ってきた活動も紹介し、互いの団体について知る良い機会であった。また、私たちが今後活動するにあたって非常に参考になるミーティングであった。

【今後の展望】

来年度は再びキャンパスでの活動を行いたい。コロナ禍で培ったオンライン上での情報発信を今後も続けていきたい。また、青山学院高等部 Aoyama Second Chance と今後一緒に活動することができれば、活動範囲が広がるのではないかと考えている。今後、食品ロス削減は当たり前の中になることが予想されるため、青学生に対して食品ロスに関する有益な情報、活動を今後も行っていく必要があると考える。

インドネシアプログラム

インドネシア現地カウンターパート（JOC）及び国内関連他団体との多岐にわたる交流会

活動場所：オンライン

活動期間：通年

（国内他団体とのオンライン交流会：6月21日、7月11日、7月12日、7月19日）

参加人数：

＜オンライン交流会＞ Roote メンバー 4名（2・3年）+ 交流先団体メンバー若干名

＜インドネシア/JOC との交流＞ Roote メンバー 7名 + JOC メンバー 10名

【活動内容】

今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、オンラインで行える活動に尽力し大きく二つを実施した。

第一にインドネシアやゴミ問題に取り組む自分達と類似した活動を行う国内団体との交流会の開催である。SNS を用いた活動を進める中で知り合った複数団体と「互いの目標を知り今後の活動に生かす」という目的のもと、知識の交換やディスカッションを行った。

次に、インドネシア現地のカウンターパートである Jakarta Osoji Club (JOC) との連携を年間で継続し、大切にしたい。2021 年 1 月と 3 月にはオンラインミーティングを行い、双方の現状や活動、また各国内の社会状況について近況報告を行うとともに、今後の活動の方向性について議論した。

これらの他に、毎週行われるプログラム内での定例ミーティングに加え、Instagram と Twitter を利用してインドネシアやゴミ問題に関する情報を発信することで、青学生が Roote インドネシアプログラムに気軽にアクセスできる環境を作った。

【スタッフ所感】

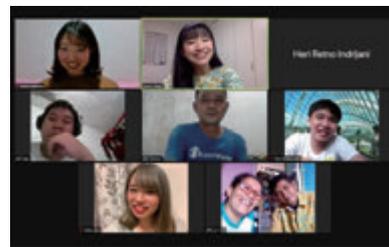
新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインに活動が限られた中、他団体交流や新歓活動、及び、JOC との交流をすることができた。そして、JOC とのミーティングの中でオンライン授業の提案を受け、新たな活動の場を探ることができた。困難な環境下だったが有意義な活動ができた。

【今後の展望】

新型コロナウイルスの収束までは、今年度築き上げてきたオンライン活動を中心に行っていく。SNS はターゲットを青学生に限らずインドネシアの方々に広げていく。また、現在インドネシアとの交流の一環として、現地学生を対象にしたオンラインでの授業を企画・立案中である。

Instagram : @roote_indonesia

Twitter : @roote_indonesia



ネパールプログラム

ネパールのゴミ問題に関するオンラインディスカッションプロジェクト

活動場所 : Zoom

活動期間 : 9 月 23 日 (水)

活動人数 : 9 名 (学生スタッフ 2 名、ネパールの中学生 6 名、中学校の先生 1 名)

【活動内容】

環境が専門の先生を交えて、ネパールのゴミ問題をテーマに現地の中学生とオンラインディスカッションを行った。

【スタッフの所感】

当プロジェクトの目的は、ネパールの学生が深刻なポイ捨ての現状を再認識した上で、その原因と改善策を探り、ポイ捨てをなくすために自ら行動を起こすというものである。はじめに全体でア

イスブレイクを行った。その後、いくつかの話し合いテーマに沿って様々な角度から意見交換を試みた。なお、ディスカッションは全体を通して英語で行われた。

多くの生徒は自分の考えを共有し、こちらにも意見を求めてくれるなど、活発な議論ができた場面が見られた。衛生環境の悪化がもたらす影響について、健康被害や外観への影響だけでなく、住民の精神的な被害について言及できたのはよかった。また、「道路にゴミのポイ捨てが絶えない原因は、ゴミを拾ってくれる人たちへのリスペクトが欠けているからである」という学生の意見は私たちに新しい視点を与えてくれ、大変参考になった。一方で、インターネット環境が不安定であったり、音声聞き取りづらかったりなどシステム上の問題があったことに加え、対面ではないが故に緊張感の薄れも見られた。進行した立場から言えば、英語が聞き取れない場面がいくつかあり、上手く場を収めることができなかつたのが反省点である。

【今後の展望】

来年度の活動形態については状況次第であるが、対面でなくともできる広報活動や交流会の実施に向け、SNSでの配信活動を開始したい。当プロジェクトの改善点を踏まえ、今後は青学生を巻き込んだ企画を実現していきたい。

Instagram : @roote_nepal

フィリピンプログラム

竹ノ塚視察

活動場所：東京都足立区竹ノ塚 ニューハングリー

活動日時：12月26日（土）

活動人数：5人（学生スタッフ5人）

視察対象：ニューハングリーの店員さん

【活動内容】

今年度は現地での活動を断念せざるを得ない状況であるため、在日フィリピン人への学習支援へ活動の展開をシフトし、ニーズ調査のために在日フィリピン人が多い竹ノ塚にて視察を行った。ここでは、ニューハングリー（フィリピン料理屋）の店員さんに竹ノ塚在住の在日フィリピン人の状況を伺った。結果、この視察で判明したことは、幸いなことに在日フィリピン人の間で学習に関する問題がなかったことである。

まず、懸念していた日本語教育についていけるかという点は、現在学習を受ける子供世代は在日フィリピン人2世、3世あたりで、生まれた時から日本語の環境で育っているため、日本語は堪能であるとのことであった。また、家計の都合で塾に通えない子供がいるのではないかと懸念もあったが、フィリピン人のコミュニティにて就職情報が流されており、比較的家計状況が良く、ほとんどの子供が塾に通っているとのことだった。尚、複雑な高校受験の情報に関してコミュニティ内で共有がなされているとのことであった。また店員さんに、「ここはコミュニティがしっかりあるから心配ない」という力強いお言葉も頂いた。以上の点から、学習支援の企画を行わないこととした。

【今後の展望】

現在の新型コロナウイルスの状況に対応した活動を継続することが難しいため、活動を一時休止する。しかし、昨年に新型コロナウイルスの影響で中止となったプロジェクトが一部完結していないため、その件に関する活動は行う予定である。また、現在の所属スタッフは各々で別々のボランティアをして、経験を積み重ねていく予定である。

5.AOGAKU ボランティアネットワーク

AOGAKU ボランティアネットワークは、青山学院大学の学生が所属するボランティア団体同士の連携を高め、ボランティアセンターとの協働をより積極的に行うために設立した登録制の学内ネットワークです。青山キャンパス、相模原キャンパスで活動する学生ボランティア団体がネットワークを介して繋がることによって相互交流が可能となり、活動の幅が広がることを目的としています。

青山キャンパス

きすあに



毎週水曜日の昼休みに動物について勉強会をしています。
アニマルウェルフェア向上・生物多様性の保護を目的としながらも動物愛護への多様な価値観を受け入れて活動しています。
毎週末にはInstagramで身近にできる動物愛護活動について更新しています。

メッセージ：

「キスしたいほど動物が好き」青山学院大学動物愛護団体きすあにです。私たちは、愛玩動物・野生動物・実験動物・動物園動物・家畜動物など様々な動物の立場について勉強し活動しています。そのため、動物が好きな人も環境問題やエシカルに興味のある人も幅広く活動できる団体だと思います。

Instagram : @kisuani

Twitter : @kisu_ani

しぶっこ



しぶっこは「本当にこどもテーブルを必要としている人」に情報を届けることを目的に渋谷区こどもテーブルの情報や体験談、インタビュー記事をInstagramをはじめとするSNSで発信する活動です。ボラセンや渋谷区社会福祉協議会と連携して渋谷区こどもテーブルを盛り上げます！

メッセージ：

「本当にこどもテーブルを必要としている人に届けたい」という気持ちからはじまったしぶっこの活動を通して、学生にも「こどもテーブル」や「こどもの貧困問題」について認知してもらいたいと思っています。学生の得意分野であるSNSを使ってこどもテーブルの魅力発信をするので、是非フォローしてください！

Instagram : @shibukko_aoyama

Facebook : @aoyama.shibukko

Twitter : @shibukko_aoyama



グリーンバード青山学院大学ゴミ拾い愛好会



- ・ 大学周辺でのゴミ拾い活動
- ・ 高校生以下を対象とし、キャンパス内・周辺を案内しながら清掃活動を行う「オープンキャンパスおそうじ」
- ・ 神宮前や代官山地区のボランティア団体と協力して活動



メッセージ：



グリーンバード青学チームでは毎月第2・4週の月曜1限前と金曜5限後に青山キャンパス周辺でゴミ拾い活動を行っています。黙々と掃除するのではなく、参加者とコミュニケーションを取りながら楽しく活動することをモットーとし、和気あいあいとした活動が特徴です。学生だけでなく、教職員の皆様のご参加もお待ちしております！

Instagram : @greenbird_aoyamagakuin

Twitter : @greenbird_agu

青山子ども会



工夫を凝らした工作やゲームなどを通して、子どもたちと一緒に遊びます。1回の活動につき4人のリーダーが中心となって活動内容を検討し、ミーティングにて部員全員で話し合います。当日はリーダーの他に数名がサブリーダーとして活動に参加します。



メッセージ：



私たち青山子ども会は児童福祉の向上を願い、実際に子どもたちと接していく中で共に成長していくという姿勢を持って、子どもたち一人ひとりに内在する可能性を引き伸ばし、より良い人格形成の援助として実践活動を行う児童福祉ボランティア団体です。「子どもが好き!」「将来先生になりたい!」「ボランティアをやってみたい!」などの想いのある方は、ぜひ私たちと一緒に活動しましょう!

HP : <https://aoyama-kids-company.jimdofree.com/>

Instagram : @aoyama_kids_company

STUDY FOR TWO 青山学院大学支部

使用済み教科書の回収・販売を通して得た利益をラオスやバングラデシュなどといった途上国の教育支援に寄付しています。文化祭などの学内イベントにも積極的に参加します。

メッセージ：

こんにちは！ SFT 青山学院大学支部です。この団体は「青学生の強みであるクリエイティブティを活かし、伸ばすことができる」団体であると考えています。とても自由な雰囲気、教科書の回収・販売だけに留まらず、誰でも様々な資金調達イベントの企画をすることができるからです。どんな目的を持っているかに関わらず少しでも活動に興味を持ってくださった方、各 SNS アカウントへのメッセージやイベントへの参加をお待ちしております。

HP : <https://studyfortwo.org/>

Twitter : @Study42_aogaku

Instagram : @study_for_two_agub

国際政治経済学部公認団体 SANDS

「学内事業」…WFP に共鳴した 1016 キャンペーンなど、青学生に対して SDGs の啓発・実践を目的とした企画や講演会を実施



「教育機関向け事業」…小学校、中学校など教育機関を対象に、SDGs の啓発・実践を目的としたワークショップを実施

「地域企業向け事業」…企業や地域と協働し社会課題の解決を目指すプロジェクトの実施
その他、SDGs 全般の勉強会、広報活動、団体内でのイベントなど

メッセージ：

SDGs 達成のために大学生は何ができるかを考え、行動し、周りの人への influencer になっていこうという目標を掲げ活動しています！様々な経験を積み成長したい方、社会問題の変革者になりたい方、一緒に活動できることを楽しみにしています！



Instagram : @agu_sands

Twitter : @agu_sands

TsunAGU ボランティア愛好会

メインの活動として年に 2 回程、学食にてヘルシーメニューを提供させて頂いています。このメニューを一食食べると、フィリピン等の子供たちに温かい給食が一食届けられます。その他にも、セミドライフルーツの販売や学祭での出店など食に関わる活動をしています。



メッセージ：



私達は先進国と途上国で栄養を分け合うことで肥満と飢餓など双方の健康を同時に改善する「Table For Two」という考え方の下、活動しています。社会貢献に興味のある人はもちろん、美味しいものや健康が好きな人、学生連合「TFT-UA」の活動にも参加することで他大学の学生と交流する人もいます。興味を持ってくださった方はお気軽に見学にいらしてください！

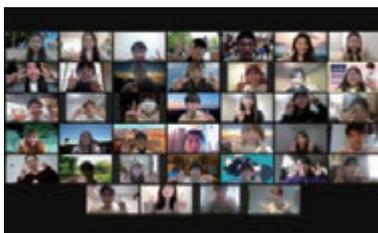
Instagram : @tsunagu_tft

Twitter : @tft_aogaku

アイセック青山学院大学委員会

AIESEC 私たちアイセックは、世界 100 以上の国と地域に約 40,000 人のメンバーを持つ世界最大級の学生団体です。学生を対象とした挑戦機会の運営・参加を通じて若者のリーダーシップを育むことで、平和で人々の可能性が最大限発揮された社会の実現を目指しています。

メッセージ：



2019 年度までは海外インターンシップ事業の運営を中心としていましたが、2020 年度からはオンラインの国際交流イベントや社会課題に挑戦する機会の運営などにも活動の幅を広げています。
アイセックのメンバーでなくても参加できる機会もあるので、ぜひお気軽にご連絡ください！

HP : <http://www.aiesec.jp/>

Instagram : @aiesec_aoyama_university

Youth for Ofunato

2020 年度は震災 10 年の節目に、岩手県大船渡市越喜来地区を中心とした地域住民と中高生とともにコロナ禍においても実現可能な地域活動を鎮魂の意を込めて企画・実施しました。地域住民の交流機会創出、地域活動の担い手育成を狙いとし、毎年実施しているペットボトル灯籠プロジェクトの一環として本企画を行いました。



メッセージ：

岩手・大船渡でゆるっとがっつり震災復興！地域創生！新メンバー、年中募集中!!!

HP : <https://youthforofunato311.jimdofree.com/>

Facebook : @YouthforOfunato

相模原キャンパス

fan x fun 学生ボランティア愛好会



私たちは、国内部と国外部に分れて活動をしています！

国内部では、地域住民同士のコミュニティの場をつくることで地域の課題解決に導き、自然豊かな相模原に住む子どもたちに様々な体験を通じて学びの場を提供することを目標に、さつまいも掘りや竹を使ったイベントの開催をしています！



国外部では、フィリピンのセブ島を拠点として様々なプロジェクトを行っています。各プロジェクトが現地の人々が抱える異なる課題について考え、その課題の楽しさを通して解決していくことを目標として活動しています！

メッセージ：

fan x fun 学生ボランティア愛好会です！私たちは”楽しさで背中を押す”を理念として活動をしています！今後もこの理念に基づいて相模原市とフィリピンの人達の生活をよくしていきたいと思えます！

HP : <https://www.fanfunagu.com/outline>

Instagram : @fanfun.ph

Twitter : @fan_fun_ph

SIVA ボランティア愛好会

この団体は「一つでも多くの笑顔を SIVA から世界に」を理念として、環境、教育、国際、福祉の 4 つの領域からボランティアや国際交流をすることを目的とする。



国際部門：フェアトレードの認知向上や積極的な国際交流を目的とする。

子供部門：教育現場への訪問や古着寄付を通して、子ども達の教育を支援する。

環境部門：国内の環境問題を実際に体験し、理解を深めると共に環境改善に努める。

動物部門：動物に関するイベントに積極的に参加していく。

高嶺の花：自分達の考えたボランティアのアイデアをすぐに具現化していく。

メッセージ：

青山学院大学相模原キャンパスの中でもトップレベルの緩さを誇ってしまっているボランティアサークルになります。ボランティア活動も積極的に外部と連携することで、「行きたいボランティア活動に行く」という大人数ならではの制度を利用しているので誰もが楽しめるようになっています。



HP : <https://aogaku-siva.com/>

Instagram : @siva_agu

Twitter : @SIVA_agu

MF3.11 東北応援愛好会



2011 年の東日本大震災で多大な被害を受けた岩手県宮古市を訪問し、様々なイベントを企画しながら地域の人々と交流することで、震災について学び、そして伝えていくことを目的としています。

< 2019 年度活動 >

「学ぶ防災」への参加・宮古市長との対談・三王団地での夏祭りの企画運営・学童での学習支援など

< 2020 年度活動 >

コロナ禍のためオンラインでの交流・イベント、オンラインシンポジウム・ジャズコンサートの実施など



メッセージ：

震災から 10 年がたった今、私たちになにができるのか、何を知るべきなのかを常に考え、活動しています。先生方のサポートのもと、自分たちで自由に企画をすることが魅力の団体です。ツイッターやインスタグラムでは昨年度までの活動を掲載しているので、まずはぜひどのような団体なのかを知ってください！

Instagram : @mf3.11_sagamihara

Twitter : @11Mf3

6. 資料

6.1 ボランティアセンター利用状況

2020 年度ボランティア活動参加者集計

参加者とリピーター数		
	(単位：人)	前年度比
延べ人数	378	▲ 31
参加人数	294	▲ 56
リピーター	55	+ 10

参加カテゴリー		
	(単位：人)	前年度比
ボランティア活動	99	▲ 32
ボラサポ	0	▲ 41
セミナー・講座・シンポジウム	279	+ 42
総計	378	▲ 31

参加形態	
	(単位：人)
オンライン	259
対面	119
総計	378

参加者の属性（所属学部）と活動分野

(単位：人)										
活動分野 属性	教育	国際協力	災害・復興支援	こども支援	清掃	福祉	地域	その他	総計	前年度比
学部生	2	38	27	86	38	147	5	18	361	+ 14
文		8	8	24	14	38	2	3	97	+ 18
教育人間科学	2	4	3	16	4	13	1	2	45	+ 9
経済		1		3	4	5			13	▲ 22
法		6	6	12	7	19		1	51	+ 20
経営		3		6		9		3	21	▲ 7
国際政治経済		8	2	9	3	17	1		40	▲ 14
総合文化政策		1	1	6	2	7		1	18	▲ 1
理工		1		1	1	7		2	12	+ 2
社会情報			1	1		9			11	+ 2
地球社会共生		4	3	6	3	11		2	29	▲ 5
コミュニティ人間科学		2	3	2		12	1	4	24	+ 12
大学院生		2	2	2	1	5		1	13	▲ 3
会計プロフェッション研究科		1							1	± 0
国際マネジメント研究科				1		4			5	+ 1
国際政治経済学研究科									0	▲ 2
教育人間科学研究科									0	▲ 3
経営学研究科			2		1			1	4	+ 3
経済学研究科									0	▲ 1
理工学研究科		1		1		1			3	▲ 1
教員		1	1						2	± 0
職員						2			2	▲ 40
その他									0	▲ 2
総計	2	41	30	88	39	154	5	19	378	▲ 31
前年度比	▲ 13	▲ 50	▲ 57	+63	+ 39	+ 27	▲ 6	▲ 34		

青山キャンパス集計

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

2020年度 新規登録	7団体
----------------	-----

2. ボランティア等募集件数

月別ボランティア等募集件数

(単位: 件)

月	件数
4	2
5	0
6	61
7	37
8	35
9	35
10	33
11	43
12	36
1	45
2	38
3	51
合計	416

カテゴリー別ボランティア等募集件数

(単位: 件)

カテゴリー	件数
ニュースレター	325
ボランティア募集	35
イベント	27
講座・セミナー	10
シンポジウム	9
助成金情報	5
その他	5
合計	416

3. 月別来室者数

	青学生		教職員		他大学生		一般		合計	前年度比
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
4月	0	1	0	0	0	0	0	0	1	▲ 45
5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	▲ 53
6月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	▲ 37
7月	4	2	0	0	0	0	0	1	7	▲ 35
8月	0	0	0	0	0	0	2	4	6	▲ 1
9月	2	9	0	0	0	0	0	0	11	▲ 1
10月	7	11	0	0	0	0	2	4	24	+ 3
11月	7	5	0	0	0	0	0	0	12	▲ 59
12月	0	11	0	0	0	0	1	0	12	▲ 37
1月	0	1	0	0	0	0	1	0	2	▲ 22
2月	1	4	0	1	0	0	4	1	11	+ 6
3月	4	18	0	1	0	0	1	0	24	+ 18
合計	25	62	0	2	0	0	11	10	110	▲ 263

4. 相談内容区分

相談内容区分	件数	前年度比
1. 国内ボランティアについて	3	▲ 33
2. 海外ボランティアについて	0	▲ 8
3. ボランティア保険について	0	▲ 1
4. 組織運営・活動について	0	▲ 2
5. 緊急支援	0	0
6. 募金・寄付	1	▲ 2
7. フェアトレード	0	0
8. ソーシャルビジネス・BOP・CSR等	0	0
9. その他	7	▲ 1
合計	11	▲ 47

5. 主な相談内容

月	相談内容
7月	ガーベラボランティア団体（任意団体） コロナ危機で医療支援の最前線に立つ病院・医療従事者を応援するための寄付を学生団体として募りたい。団体の所在地をボラセンの住所にできるか？
9月	学校ボランティアについて 今年は教育実習ができないので学校ボランティアで代替することになった。横浜市の教育実践ボランティアに申し込みたいがどうすればよいか？ 現在 WEB デザインの専門学校に通っている。 課題としてウェブサイトを作るのだが、ボラセンのサイトのリニューアル案を提示してよいか？ サークル・学生団体について 9/19(土) Green Up 企画に参加し、友達もでき良い経験になった。学生の中に活動する機会として、サークル・学生団体等の入会も考えているが迷っている。また、ボラセンが行っている企画等情報が欲しい。ボラセンは何をすればよいか？
10月	ユニバーサルマナー検定の補助申請について。申請方法が分からない。 ボランティアを探しに来た。 国内ボランティアについて 海外ボランティアについて ボランティアに興味があるが VC は何をサポートしてくれるのか？ 自宅の近くで参加できるプログラムがあれば知りたい。 手話コミュニケーション講座について。初日 30 分程遅れてしまう。
11月	学生スタッフへの参加について
12月	こどもテーブル活動について。渋谷区こどもテーブルに貢献できる活動に興味がある。

相模原キャンパス集計

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

2020年度 新規登録	2団体
----------------	-----

2. ボランティア等募集件数

月別ボランティア等募集件数

(単位: 件)

月	件数
4	5
5	2
6	1
7	2
8	7
9	5
10	11
11	6
12	11
1	2
2	9
3	5
合計	66

カテゴリ別ボランティア等募集件数

(単位: 件)

カテゴリ	件数
ニュースレター	28
ボランティア募集	21
イベント	4
講座・セミナー	8
助成金情報	0
その他	5
合計	66

3. 月別来室者数

	青学生		教職員		他大学性		一般		合計	前年度比
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	▲ 78
5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	▲ 84
6月	1	0	4	0	0	0	0	0	5	▲ 76
7月	1	0	0	0	0	0	0	0	1	▲ 82
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	▲ 20
9月	0	1	0	0	0	0	0	0	1	▲ 17
10月	2	2	1	2	0	0	1	0	8	▲ 40
11月	2	8	0	1	0	0	1	0	12	▲ 33
12月	1	1	0	0	0	0	0	0	2	▲ 26
1月	0	1	0	0	0	0	1	0	2	▲ 10
2月	1	3	0	0	0	0	0	0	4	▲ 8
3月	2	3	0	0	0	0	0	0	5	▲ 2
計	10	19	5	3	0	0	3	0	40	▲ 476

4. 相談内容区分

相談内容区分	件数	前年度比
1. 国内ボランティアについて	2	▲ 22
2. 海外ボランティアについて	0	▲ 6
3. ボランティア保険について	0	▲ 1
4. 組織運営・活動について	7	▲ 8
5. 緊急支援	0	▲ 2
6. 募金・寄付	0	▲ 1
7. フェアトレード	0	0
8. ソーシャルビジネス・BOP・CSR等	0	0
9. その他	2	▲ 39
合計	11	▲ 79

5. 主な相談内容

月	相談内容
6月	(fan × fun) 団体運営について
7月	(fan × fun) コロナ禍に於いての野外活動の実施方法について
	(fan × fun) 団体運営について
10月	相模原市社会福祉協議会を紹介して欲しい。コミュニティ人間科学部の授業への講師依頼を検討中。 (認知症サポーター養成講座受講生) 実際の活動が出来るボランティアを知りたい。学習支援や農業体験にも興味あり。
11月	(fan × fun) 地域で出来る国際協力活動について (中学生対象)
12月	(fan × fun) 相模原市地域活動・市民活動ボランティア認定制度について教えて欲しい
2月	ボランティアサークルの立ち上げ方について
3月	ボランティアサークルの立ち上げ方について
	ボランティアについて知りたい。活動したい。
	ボランティアチームを新たに立ち上げた。相模原市とのパイプ作りや情報提供など力を貸して欲しい。

6.2 青山学院大学ボランティアセンター規則

(2016年11月24日理事会承認)

改正 2018年1月25日 2018年6月18日

2019年3月28日 2019年12月13日

(趣旨)

第1条 この規則は、青山学院大学学則第58条の3第2項の規定に基づき、青山学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営について必要な事項を定めるものとする。

[青山学院大学学則第58条の3第2項]

(センターの目的)

第2条 センターは、本学におけるサービス・ラーニングとしてのボランティア活動の支援を通じて、学生、職員が社会貢献活動を体験することにより自らの学びがより豊かなものとなるよう、それらの者の自発的な社会活動への参加を促すとともに、社会の様々なコミュニティが抱える課題の解決に取り組み、社会貢献活動に積極的に関わることができるサーバント・リーダーを社会へ輩出することを目的とする。

(センターの事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) センターの目的を達成するための調査及び企画立案
- (2) ボランティア活動企画に関する情報収集及び管理
- (3) ボランティア活動への参画機会の提供
- (4) ボランティア活動の実施促進
- (5) ボランティア活動に参画する学生、団体の能力強化
- (6) ボランティア活動に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進
- (7) ボランティア活動の社会的及び教育的効果の評価と勧告
- (8) ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信
- (9) ボランティア活動及び市民社会の活性化のための調査研究
- (10) 前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

(本部及び分室)

第4条 センターは、青山キャンパスに本部を置く。

2 センターは、前条に規定する事業のうち相模原キャンパスに係るものを行うため、同キャンパスに分室を置く。

(センターの組織)

第5条 センターにセンター長1名を置く。

2 センターに副センター長1名を置く。

3 センターにボランティアコーディネーター若干名を置く。

4 センターに助手若干名を置く。

5 センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにボランティアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6 センターの運営等に必要事項を検討するため、運営委員会の下にボランティアセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

(センター長)

第6条 センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。

2 センター長は、学長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3 センター長の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 センター長は、再任されることができる。

(副センター長)

第7条 副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

- 2 前項に規定するもののほか、センター長が、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。
- 3 副センター長は、センター長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。
- 4 副センター長の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 5 副センター長は、再任されることができる。

(ボランティアコーディネーター)

第8条 ボランティアコーディネーターは、ボランティア活動に係る専門知識を有する学校法人青山学院（以下「本法人」という。）の専任の職員又は当該職員以外の者（以下「外部の専門家」という。）をもって充てる。

2 ボランティアコーディネーターの職務は、次のとおりとする。

- (1) ボランティア活動に係る情報収集及びその発信に係る支援
- (2) ボランティア活動の機会提供に係る支援
- (3) ボランティア活動の実施に当たっての外部組織の紹介及び当該外部機関との調整
- (4) ボランティア活動に係る学習機会の提供に係る支援
- (5) ボランティア活動における相談に対する対応
- (6) 学生スタッフへの指導及び助言
- (7) ボランティア活動に係るプログラム開発及びその支援
- (8) ボランティア活動における本学と外部機関との連携に係る支援
- (9) ボランティア活動に係る本学と外部機関とのネットワーク構築及びその支援
- (10) ボランティア活動に係る記録及び統計資料の作成及びその支援
- (11) 前各号に規定するもののほか、センター長がセンターの目的を達成するために必要があると認めた業務

3 ボランティアコーディネーターは、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。

4 ボランティアコーディネーターの任期は、1年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 前項の規定にかかわらず、センター長が特に必要と認める場合は、1年未満の任期を定めることができる。

6 第4項の規定にかかわらず、センターの助手がボランティアコーディネーターとなる場合の任期は、当該助手としての在職期間とする。

7 ボランティアコーディネーターは、再任されることができる。

8 第1項の規定により、外部の専門家をボランティアコーディネーターとして委嘱した場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規の定めにより、報酬・謝礼を支給することができる。

[学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規]

(センター助手)

第9条 センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用され、センターに所属する本学の専任教員とする。

[学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）]

(センター助手の職務)

第10条 助手に関する就業規則第4条第3項の規定によるセンター助手の職務は、同条第1項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

[助手に関する就業規則第4条第3項] [助手に関する就業規則第4条第1項]

- (1) 第3条に規定するセンター事業に係る業務

[第3条]

- (2) 前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

(センター助手の資格)

第11条 センター助手は、助手に関する就業規則第5条第1項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第2条第5項各号のいずれかに該当するものでなければならない。

[助手に関する就業規則第5条第1項] [青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第2条第5項]

2 前項に規定するもののほか、助手に関する就業規則第5条第2項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア活動に係る専門的知識を有する者とする。

[助手規則第5条第2項]

(センター助手の雇用手続)

第12条 センター助手の雇用は、次項から第4項までの規定による。

2 センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めるときは運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状及び当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。

3 学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。

4 候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び常務理事会で協議し、理事会の承認を得なければならない。

(センター助手の雇用契約の契約期間等)

第13条 センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手に関する就業規則の定めるところによる。

(運営委員会の構成)

第14条 運営委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 大学宗教部長
- (4) ボランティアコーディネーター
- (5) 本学の職員の中からセンター長が指名する者 若干名
- (6) 事務局長
- (7) 学生生活部長
- (8) 政策・企画部長
- (9) 学務部長
- (10) 相模原事務部長

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項各号に規定する委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。

3 前項及び第1項第5号に規定する委員の任期は、1年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前項の委員は、再任されることができる。

5 運営委員会に委員長1名を置き、第1項第1号に規定する委員をもってこれに充てる。

(運営委員会の招集、開催、表決数等)

第15条 運営委員会は、委員長が招集し、議長となる。

2 運営委員会は、年2回以上定期的に開催する。ただし、委員長が必要と認めるときは、随時開催することができる。

3 運営委員会の開催は、委員の3分の2以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4 運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5 委員長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

(運営委員会の審議事項)

第16条 運営委員会は、次の事項を審議する。

- (1) センターの運営等に係る基本方針に関すること。
- (2) センターの予算及び決算に関すること。
- (3) センター長、副センター長及びセンター助手の人事に関すること。
- (4) ボランティアコーディネーターの委嘱、任期等に関すること。
- (5) 前各号に規定するもののほか、実務委員会から付議されたこと。

(実務委員会の構成及び開催)

第17条 実務委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) ボランティアコーディネーター
- (4) 学生生活部から 若干名
- (5) 学務部教務課から 若干名
- (6) 国際部国際交流課から 若干名
- (7) 相模原事務部から 若干名
- (8) 本学の職員の中からセンター長が指名する者 若干名
- (9) 学生スタッフの代表

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項各号の委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。

3 第1項第4号から第9号までに規定する委員の任期は、1年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前項の委員は、再任されることができる。

5 実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。

6 センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

(実務委員会の業務)

第18条 実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。

- (1) センターの事業計画等に関すること。
- (2) センターが行うボランティア活動に係る企画、立案及び実施に関すること。
- (3) 外部の組織及び機関との連携に関すること。
- (4) センターの予算の執行に関すること。
- (5) 学生スタッフに関すること。
- (6) 前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要なこと。

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項の規定による協議の結果を、運営委員会に報告する。

(学生スタッフ)

第19条 センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。

2 学生スタッフは、実務委員会の委員の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。

3 前項の補佐業務は、無償とする。

4 学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。

(所管)

第20条 この規則は、学生生活部が所管する。

2 センターの運営等に係る事務は、学生生活部学生生活課及び相模原事務部学生生活課が所管する。

(改廃手続)

第21条 この規則の改廃は、運営委員会及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附 則

この規則は、2016年11月25日から施行し、2016年10月1日から適用する。

附 則 (2018年1月25日)

この規則は、2018年4月1日から施行する。

附 則 (2018年6月18日)

この規則は、2018年6月19日から施行し、2018年4月1日から適用する。

附 則 (2019年3月28日)

この規則は、2019年4月1日から施行する。

附 則 (2019年12月13日)

この規則は、2019年12月14日から施行する。

6.3 ボランティアセンタースタッフ一覧

2020 年度運営委員会

センター長（委員長）	飯島 泰裕 教授
副センター長	大宮 謙 教授
大学宗教部長	塩谷 直也 教授
ボランティアコーディネーター	秋元 みどり
	佐藤 亜希
	島崎 由宇
	中尾 匠吾
	三神 憲一
事務局長	馬場 俊和
学生生活部長	内山 吉嗣
政策・企画部長	金子 絹子
学務部長	立花 慎一
相模原事務部長	原 啓

2020 年度実務委員会

センター長（委員長）	飯島 泰裕 教授
副センター長	大宮 謙 教授
ボランティアコーディネーター	秋元 みどり
	佐藤 亜希
	島崎 由宇
	中尾 匠吾
	三神 憲一
学生生活部（学生生活課）	斉藤 恭子
学生生活部（スポーツ支援課）	芦田 太郎
学務部教務課	基 修二
国際部国際交流課	瀧澤 雄河
相模原事務部（学生生活課）	松本 宏美
相模原事務部（学務課）	舘田 純
センター長指名	高橋 良輔 教授
学生スタッフの代表	堀内 秀平（文学部比較芸術学科）

学生スタッフ

マネジメントチーム

代表	堀内 秀平
副代表	岡本 凌翼
	菅野 葉月
	真船 絵里
	柳原 果歩
	田中 杏花
会計	小田 佳祐

所属プログラム

インドネシア	フィリピン	難民	食品ロス	福祉
落合 ありさ	荘 禮陽	小田 佳祐 (兼)	弓野 妃香莉	堀内 秀平
中村 真子	塚田 美咲	佐藤 桃子	水留 悠里	近江 悠
川杉 麻衣	柳原 果歩	平尾 桃子	鈴木 怜実	丸山 ちはる
笹田 まどか	小田 佳祐 (兼)	西尾 和恵	野呂 郁翔	田中 杏花
中山 侑姫	盛定 栄珠	荒谷 与音	松本 晃一	福井 咲希
相良 公亮	日置 ちひろ	寺田 瑠衣	鈴木 七海	
新井 真由子 (兼)	榮浪 健悟		石渡 二葉	
	新井 真由子 (兼)		伊藤 早枝	
	岸本 美鈴		新堀 綾子	
熊本	ネパール	防災	運営サポート	
岡本 凌翼	富山 もな	高橋 幸智	磯崎 諒介	
在本 茉由	谷川 彰		菅野 葉月	
安蒜 紗希	塗師 蘭		真船 絵里	
小林 直輝			齊藤 桃佳	
茂島 大志				
佐久間 泰誠				
牧江 菜月				
松岡 花音				

6.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆様

(順不同・敬称略)

【提携・協力団体】

東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター

渋谷区

渋谷区社会福祉協議会

しぶやボランティアセンター

東京都生活文化局

株式会社 I V Y C S

秋田県仙北市

秋田県仙北市教育委員会

岡山県総社市

岡山県総社市教育委員会

宮城県塩竈市

宮城県塩竈市教育委員会

金沢市福祉健康局

南阿蘇村役場

阿蘇復興への道

一般社団法人九州学び舎

NPO 法人阿蘇エコファーマーズセンター

日本財団学生ボランティアセンター

災害救援ボランティア推進委員会

相模原市社会福祉協議会

株式会社ミライロ

全国キャラバンメイト協議会

日本サービス・ラーニング・ネットワーク (JSLN)

Aoyama Second Chance

NPO 法人ジーエルエム・インスティテュート

株式会社ピリカ

なな山緑地の会

東京地球農園

学校法人アジア学院

NPO 法人 GLOBE JUNGLE

NPO 法人 FILMe * Earth& あーすりんく

みんなの世界テーブル

日本財団パラリンピックサポートセンター

一般社団法人東京ヒューマンライブラリー協会

ジャカルタお掃除クラブ (JOC)

Canossa Youth Volunteer (CYV)

Canossa Health Social Center Brgy

NPO 法人アジアキリスト教教育基金 (ACEF)

【寄付・助成をいただいた皆様】

青山学院大学後援会
青山学院校友会
青山学院校友会大学支部
東日本復興支援コンサート

【その他、お世話になった皆様】

ポートランド州立大学パブリックサービス研究・実践センター
Collaborative Schools Networks
Jana Uddhar Secondary School
DHURMUS SUNTALI FOUNDATION
相模原市立共和中学校
東京都立大泉西中学校
手話教室華乃樹

故 高橋 良輔先生を偲んで

青山学院大学ボランティアセンター開設に多大なるご尽力と貢献をしていただき、開設後も副センター長として2020年3月まで任期を全うし、ボランティアセンターを支えてくださった高橋良輔先生が、2021年3月5日急逝されました。

高橋先生は、2016年当時の本学学長指名により大学内に設置されたボランティアセンター設置準備委員会のワーキンググループに加わり、その中心人物としてボランティアセンター開設に向け熱意を持って取り組んでくださりました。

そして、2016年10月ボランティアセンター開設後も副センター長としての立場から、ボランティアセンター事業の拡充やサービス・ラーニングの展開等、現在のボランティアセンターの基盤形成からその発展に多大なる貢献をしてくださりました。

学生支援においても、ご自身の経験と研究をもとにした学生スタッフへのプロジェクト立案研修等の指導や、災害発生時には被災地に視察へ赴き、学生のボランティア活動における現場の陣頭指揮を取るなど、学生が現地で活動を行うための基盤作りにご尽力くださりました。

また、サービス・ラーニングの展開においては、2019年度前期に青山スタンダード科目(キャリアの技能)に開講されたパイロット科目「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」を自身の担当科目とし、その成果から大学のサービス・ラーニング機能を位置付けることへの一翼を担ってくださる等、数々の高橋先生の取り組みから、現在のボランティアセンターの姿があります。

学生のみならず、地域の方々やセンタースタッフに対しても常に丁寧な配慮を忘れず、真摯に向き合ってくださいました高橋先生のその姿勢と想いを我々は引継ぎ、今後に紡いでいきたいと思っております。

高橋先生のご功績に深甚なる敬意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。

青山学院大学ボランティアセンター一同



(一番右が高橋先生)



**AOYAMA GAKUIN
UNIVERSITY
VOLUNTEER CENTER**